慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	奈良絵本『百人一首』について
Sub Title	Research on the Nara-ehon Hyakunin-isshu
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2011
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.101, No.1 (2011. 12) ,p.218- 230
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川村晃生教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01010001-0218

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奈良絵本『百人一首』について

石川　透

一、はじめに

室町時代後期から江戸時代中期にかけて制作された奈良絵本は、一般的には、御伽草子や幸若舞曲の作品群が絵入り本に仕立てられたものと考えられているが、実際には、それらのジャンルと同じように、平安朝物語や軍記物語、さらには、随筆文学等の作品群も、奈良絵本に仕立てられている。そのような中で、さすがに数は少ないものの、和歌文学作品も、奈良絵本として作られている。

それらの内、今回は、『百人一首』を取り上げて、紹介をするとともに、比較研究の可能性を探ってみたい。

二、奈良絵本という言葉

奈良絵本という言葉は、明治時代に作られたと考えられ、諸説あるが、明治ごく初期以前から存在していた、「奈良

絵」という、奈良の土産物の絵に似ている本であるから、「奈良絵本」と名付けられた、と考えられる。

現在も奈良市内で販売されている「奈良絵」の土産物は、素朴な決まったデザインの絵であるから、明治時代の「奈良絵本」は、おそらく、素朴な彩色入りの本を指したのであろう。室町時代後期に作成された素朴な絵巻や絵本、そして、おそらく、間似合紙に記された横型の絵本群が、これに相当しよう。しかし、その後、素朴な絵の作品以外、例えば、縦型の細密な挿絵を持つ絵本や、豪華な絵巻物も、同時期に作成された作品として、「奈良絵本」に含めるようになったのだと思われる。

このような経緯があるので、「奈良絵本」という言葉を使う場合でも、研究者により、指し示す範囲が異なることがある。このような問題も存在するが、制作時期もかなり限られていたことがわかってきたし、何より、現実に浸透し、教科書にも使用され始めているので、「奈良絵本」を、室町時代後期から江戸時代中期の約百五十年間に制作された彩色絵入りの写本群、といった意味で使用したい。

ということは、「奈良絵本」は、あくまでも本の形の一つであって、ジャンルを特定するものではない。大学によっては、奈良絵本は、国文学研究上のジャンル名である御伽草子と同義語として使用するところもあるが、そうではない。内容上は、さまざまなジャンルが奈良絵本に仕立てられており、その幅の広さは、簡単に言えば、江戸時代前期に絵入り本として出版された版本と同等なのである。

見方を変えて言うと、江戸時代前期に出版された絵入り本の多くは、奈良絵本としても制作されているのである。おそらくは、一般普及本としての版本に対する、豪華な手作りの写本としての需要があった、ということになる。ということは、制作者側は、作品の内容やジャンルには、こだわっていなかったはずなのである。もちろん、豪華本を注文す

る側の好みがあるから、ジャンルの偏りはあるのだが、今日では、さまざまな内容を持った奈良絵本が報告されている。

そのような中に、江戸時代前期には、絵入り本として出版された『百人一首』も存在しているのである。

三、『百人一首』の絵入り版本と奈良絵本

『百人一首』は、鎌倉時代に藤原定家によって編纂された歌集である。その成立過程については、さまざまな研究があり、早い段階での絵入り本も存在したようだが、残念ながら、江戸時代以前の絵入り本は現存していない。今後、それは出現するかもしれないが、現段階で報告されていないことからすると、ほとんど制作されていなかったのであろう。

現存する『百人一首』の古い写本は、ほぼ字のみなのである。そして、江戸時代における最初の『百人一首』の版本も絵を伴っていない。今日では、『百人一首』は、カルタとして、絵を伴うのが普通であるが、もちろん、カルタとしての『百人一首』も、江戸時代以前の作例はない。さらには、江戸時代の女性向けの往来物には、絵入り『百人一首』を含むものが多いが、これも、江戸時代前期の時点ではさほど多くは作られてはいない。カルタの『百人一首』が普及するのも、江戸時代中期以降であろう。

このように、基本的には、『百人一首』が絵入り本として、知名度を上げるのは、江戸時代中期以降で、その後、爆発的に普及して、今日のさまざまな漫画やゲームへと連綿と続くのである。

こうした状況であるから、江戸時代前期が制作の中心である奈良絵本としては、『百人一首』が多く存在しているわけではない。奈良絵本『百人一首』の最初の本格的な研究・紹介は、吉田幸一氏『百人一首　為家本・尊円親王本考』（一九九九年五月、古典文庫）であろう。吉田氏は、この本において、奈良絵本『百人一首』を全文カラーで紹介されて

いる。その研究編では、吉田氏は、以下のように述べている。

ところで、今日までに奈良絵本の中に、「百人一首」の歌仙絵が存在したことや、その内容につき誰も言及した人はいないようだ。「百人一首」歌百首を題材としたのではなく、和歌の作者たる人物、すなわち百人の歌仙の似絵（座像・肖像画）の奈良絵本である。今まで奈良絵では、人物描写は没個性的で、識別できる人物画はないと見られて来たが、「百人一首」は、物語や説話のように、右から左へと詞書が続くプロットは、ない。それゆえ歌仙に男女の別があるだけで、すべて一場面（一ページ）に歌仙とその歌一首とが画賛として書かれている。これは奈良絵としては初めての試みだったであろう。

古典籍を『古典文庫』として数多く紹介している吉田氏の発言であるから、やはり、奈良絵本の『百人一首』は珍しいのであろう。この前には、赤井達郎氏の奈良絵本の論を引用している。そして、紹介された奈良絵本『百人一首』（以下吉田本と呼ぶ）については、以下のように述べている。

では一体この奈良絵の主（作者）は誰なのか、と見れば、箱の蓋に「伏見殿邦房親王」とある。（中略）邦房親王（天正三年元服、元和七年薨）（中略）この奈良絵本は、慶長勅版ではないが、邦房親王という堂上家の活動としての奈良絵本と見ることができ、しかもこの奈良絵本は、構図や多彩な色と金を用いて前代の情趣にあやかったもの。また奈良絵本は人物描写が没個性的で簡略な構成というのが通説であるが、この「百人一首」の似絵は、天皇以下

君臣男女とも各人は比較的に写実的で、版本の素庵本にも増して、表情豊かであり、それぞれの服装も色彩鮮やかで、衣の線などにも専門絵師臭のない、初々しさが感じられるではないか。しかも「百人一首」歌仙絵としては、素庵本と相前後する現存最古本ではないかと思う。

このように、吉田氏は、邦房親王を吉田本の作者をとしている。これを信じるならば、江戸時代でもごく初期の元和年間までの作品となってしまう。しかし、直接の署名に依らない筆者については、箱書きや極め札があっても、いったんは疑う必要がある。細かく調査をすると、これらの多くが、間違っているからである。

私の結論を先に言うならば、少なくとも、この吉田本の文字の筆跡は、邦房親王のものではない。おそらくは朝倉重賢の晩年に近いものである。筆跡を除いても、その紙や体裁から、慶長・元和年間頃ではなく、延宝年間前後の制作ではないかと思われる。

十年程前であっても、奈良絵本についての認識は、このレベルであって、同じ筆跡の作品を室町時代写とか、十九世紀の写とする専門の研究者も多く存在したのである。ともかくも、吉田氏による紹介は、奈良絵本『百人一首』を考察する上では、画期的であり、このほぼ原寸大のカラー版による影印は、今後も奈良絵本『百人一首』研究の中心となるであろう。

四、架蔵奈良絵本『百人一首』

ここに、吉田本『百人一首』と深く関わる、二つの奈良絵本『百人一首』を紹介し、その意義を述べたい。架蔵本の

中に、吉田本『百人一首』ときわめてよく似た『百人一首』が二つ存在するのである。一つ（架蔵A本）は、少なくとも文字の部分は、吉田本とまったく同じ筆跡である。ということは、朝倉重賢の筆跡と考えられ、しかも、その類似度から、時期も近い、朝倉重賢の晩年に近い筆かと思われる。

朝倉重賢については、拙著『奈良絵本・絵巻の生成』（二〇〇三年八月、三弥井書店）や『奈良絵本・絵巻の展開』（二〇〇九年五月、三弥井書店）等に記したが、奈良絵本・絵巻の詞書きを最も多く書写した人物で、絵巻の一部に署名した作品が存在している。おそらくは、長い期間、絵巻や豪華絵本を専門に書写していたと思われ、その初期は大きく流れるような文字を書くが、徐々に字が小さくなり、晩年は少し震えのようなものが見られる筆跡になったと考えている。署名があるのは、比較的に早い時期と思われるものである。

朝倉重賢は、その生没年も判明しない無名の人物であるが、その初期の絵巻は、浅井了意が詞書きを記した絵巻と紙質や体裁が酷似することや、朝倉重賢筆の詞書きを持つ絵巻の絵の部分に、海北友雪の落款が存在する作品があること等から、寛文年間前後から、延宝年間以降まで活躍した人物であると考えている。

となると、架蔵A本や、文字が同筆の吉田本は、とうぜん、その頃の制作となり、しかも、朝倉重賢は、京都の絵草紙屋である、城殿や小泉といった店の仕事をしていることから、やはり、京都の絵草紙屋の仕事となるであろう。城殿や小泉は、主に大名家に奈良絵本・絵巻類を納品していたと考えられることから、これらの奈良絵本『百人一首』も、大名家や裕福な商人が所蔵していたのであろう。

その架蔵A本とよく似た奈良絵本『百人一首』が、架蔵B本である。しかし、文字の筆跡は、吉田本・架蔵A本とは、明らかに別筆である。また、人物絵については、三伝本とも、誰の手になるのかは分からないが、それぞれが、類似す

るところがある。

五、奈良絵本『百人一首』三伝本の書誌

ここで、この三つの伝本の主な書誌を、比較できるように一覧にしてみよう。吉田本、架蔵A本、架蔵B本の順番で列記する。

吉田本

形態、奈良絵本、二冊

寸法、縦二三・三糎、横一七・一糎

表紙、薄茶色地金繡模様表紙

外題、左上題簽「百人一首」

内題、なし

料紙、斐紙

奥書、なし

複製、『百人一首　為家本・尊円親王本考』

架蔵A本

形態、奈良絵本、二冊
寸法、縦二三・五糎、横一七・三糎
表紙、紺色地金泥模様表紙
外題、中央上題簽「百人一首」
内題、なし
料紙、斐紙
奥書、なし
複製、なし

架蔵B本
形態、奈良絵本、二冊
寸法、縦二三・八糎、横一七・七糎
表紙、水色地金繡模様表紙
外題、左上題簽「百人一首」
内題、なし
料紙、斐紙
奥書、なし

複製、なし

この半紙本の大きさの場合、ほとんどの奈良絵本は、綴葉装であって、両面書きなのであるが、この奈良絵本『百人一首』は、三伝本ともに、片面書きの袋綴じなのである。半紙本より大きい、特大本の奈良絵本や横型の奈良絵本では、袋綴じが主流なのであるが、縦型のこの大きさで袋綴じであるのは、他にほとんど例を見ない。これだけをとっても、この三伝本の共通性は明らかであろう。紙質も近いので、ほぼ同じ頃の制作かと思われる。

六、奈良絵本『百人一首』の比較

三伝本ともに、半紙本の大きさの縦型奈良絵本でありながら袋綴じであることは、何を意味するのであろうか。この大きさで、斐紙の袋綴じとなると、どうしても、開いても落ち着いた状態にはならない。開いてもすぐに綴じてしまうのである。明治時代以前の日本の本は、しんなりとした紙が特徴であるから、開けば落ち着き、手で押さえなくとも、読むことができるのである。斐紙でも、幅が大きければ、それなりに落ち着くが、幅十七糎前後では、跳ね返ってしまうのである。この体裁の奈良絵本にした、何か特殊な事情があったのであろうが、これは今後の研究課題となろう。

これらの『百人一首』を奈良絵本としてよいことは、その筆跡に朝倉重賢と思われる字が見られることからも明らかであろう。これは、他の奈良絵本・絵巻と比較しながらでないと、制作時期や制作の環境がわからないことを意味する。少なくとも、文字については、吉田本と架蔵A本については、朝倉重賢と思われ、架蔵B本も、誰とまでは分からないが、奈良絵本・絵巻によくあるタイプの文字である。

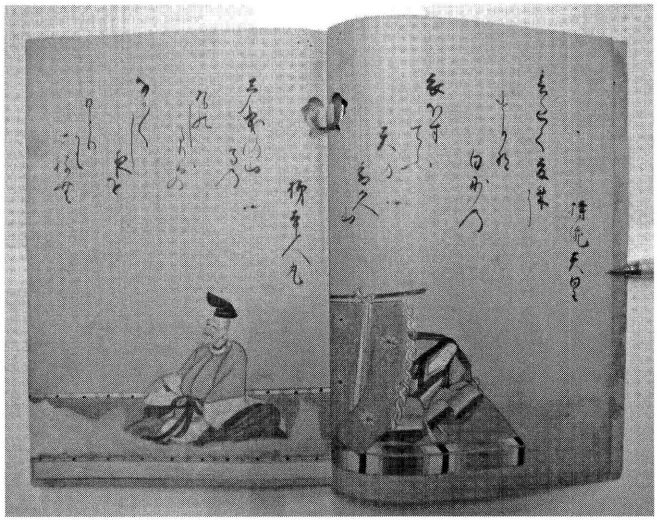
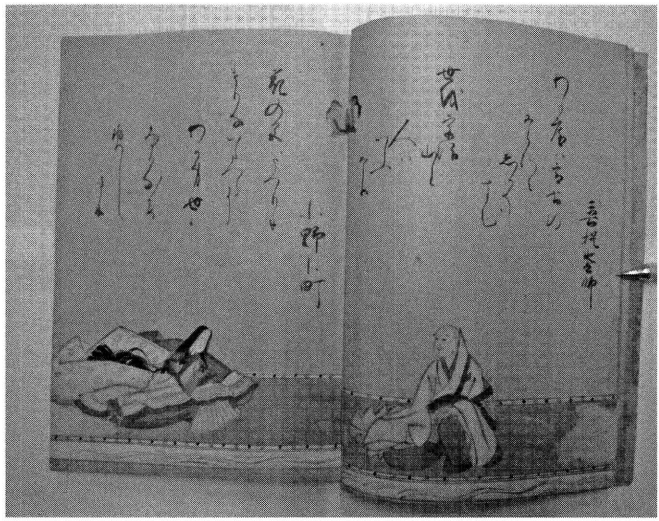
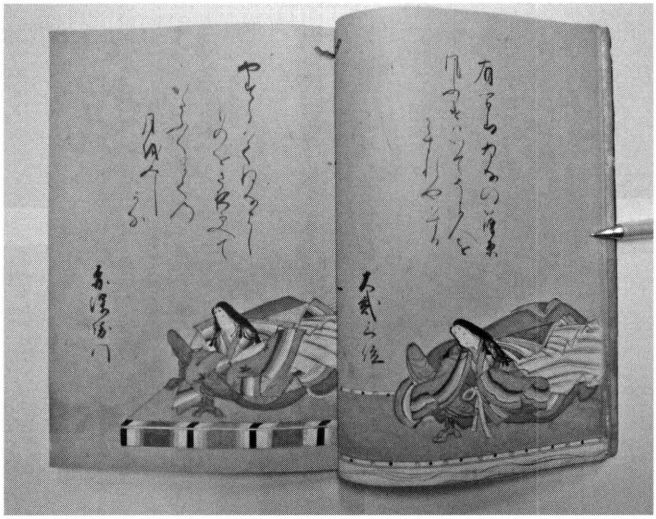
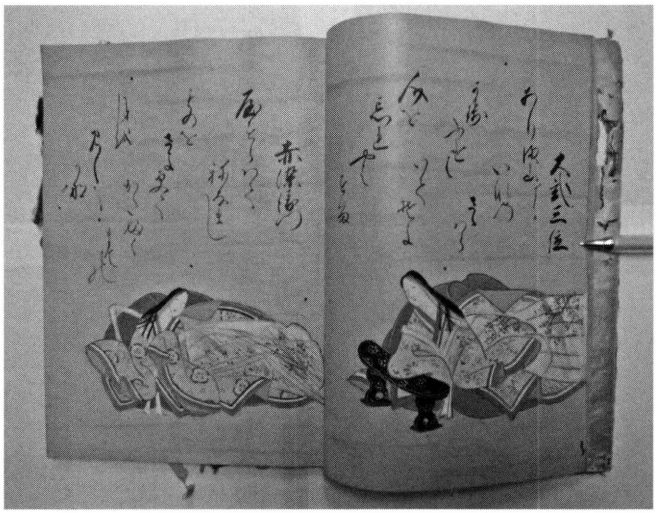
その本文については、おもしろいことに、第二首目の持統天皇の和歌の本文が、吉田本は、「春過て夏来にけらし」となっているのに、架蔵A本は、「春過て夏来にけりな」となっている。同じ筆者でありながら、しかも、時期的に近いはずなのに、このような違いが見られるのである。ちなみに、架蔵B本や、他の多くの『百人一首』の諸本は、吉田本と同じである。この和歌は、『万葉集』と『新古今集』とでの違いがある等、もともと問題のある和歌ではあるが、これはおもしろい現象である。

また、その文字の書き方を見ると、吉田本も架蔵A本も、作者名を左に書く等、少し変わった書き方も見られる。吉田本の方が、そういう箇所は多いが、このようなことは、架蔵B本や他の多くの諸本には見られない。

また、挿絵については、それぞれ違う絵師の作のように見える。単純な比較をすると、架蔵A本は、全ての人物の絵に畳を敷いている。吉田本と架蔵B本は、崇徳天皇を除く天皇には畳があるが、それ以外の人物には畳を敷いていない。色や姿勢は、それぞれが共通する場合もあれば、異なる場合もある。

いずれにしても、多くの奈良絵本・絵巻に元になった本が存在するように、これらの奈良絵本『百人一首』にも元本があったはずであるが、版本の『百人一首』も数多く、現在のところ、直接どの本を元にしたかは不明である。

七、おわりに

このような奈良絵本『百人一首』は、白幡洋三郎氏編『百人一首万華鏡』（二〇〇五年一月、思文閣出版）の口絵に類似した写真が見られるように、他にも存在していよう。それらを含めて、さらなる、伝本の出現が期待できる、さまざまな研究ができる資料なのである。今後の奈良絵本『百人一首』の研究が進展することを願い、本稿を閉じたい。

なお、最後に架蔵A本と架蔵B本の同じ箇所を上下にして、三枚ずつ、その写真を掲載する。